

めることができます。この「乾为天」はいまなお読むたびに新たな発見があり、多くの示唆を与えてくれます。

皆さんは龍が描かれた絵画や掛け軸をご覧になったことがあるでしょうか。龍の傍らには必ず雲が描かれています。龍には雲を呼び、雨を降らせる能力があるのです。天からの雨を地が受けて、百花草木、生きとし生けるものはみな潤い、勢いよく育つていく。陰陽が交わり新しい生命が生まれる。その象徴として龍を君子に準えてあるのです。しかしすべての龍にその能力が備わっているわけではありません。最初はみな「潜龍」です。

『潜龍。勿用(潜龍)なり、用うるなかれ』

将来、天を駆け巡る飛龍になる素養はあっても、生まれたばかりの龍は地に潜んでいます。「用うるなかれ」とは、実力も経験もない潜龍の段階の者を重い役職に就けてはならないし、いま自分を潜龍と思うなら、早成を急いではならないといっているのです。

しかしこの時期、ただ寝て待つというわけではありません。ここでは将来へ向けて確乎不拔の志を立てるのです。その志は野望や野心とは異なる



り、社会に大きく貢献するための高い目標です。この潜龍時代に掲げた志の大きさを如何に、将来どんな動きをなせるかが決まるのです。

しかし世間に認められるにはまだまだ時間がかかり、まったく相手にされない不遇の時期です。つらい思い、悔しい思いをたくさんしますが、だからこそ志を強くできます。また自分自身も世間の物差しを知らないため、どこまでも壮大な志を打ち立てることができるといえます。

誰に認められなくても志に従い、徳を積んでいると、その光は自然と地から漏れ出てきます。するとその光を見出し、地上へと引き上げてくれる存在があります。こうして「潜龍」は「見龍」へ成長します。

「見龍在田。利見大人」(見龍田にあり。大人を見るに利ろし)

「見龍」の「見」には、地上に出て姿が見える、自分の視野が開ける、そして自分を見出してくれた人にもみえる(出会う)と、色々な意味が含まれています。

何かを成した経緯には必ず見出しにくれた存在があるはず。応援してくれる人もそうだし、会社を採用されたということも、認められ、見出されたといえます。

見龍の時期にすべきことは、大人に学ぶこと。その大人とは自分を見出してくれた人であり、学ぶとは「真似ぶ」ことです。どんな分野でも最初は見真似で覚えていきます。見龍は決してオリジナリティーを求める時ではなく、ただひたすらに大人を真似ること、基本や型を体得するのです。

では、その見習うべき大人とはどのような人物でしょうか。「易経」では、当たり前のことを当たり前にできて、正邪を弁える人といっています。夢や志を想像していた地中から現実世界へ出てきたばかりの見龍は、大人の言動をその目に焼き付けることで物事の正邪を学びます。

昨今、企業ではコンプライアンス(法令遵守)が盛んに叫ばれています

どれだけ法律を完璧につくつても、守る人間に倫理観が欠如しては成り立つわけありません。潜龍時代の志、また見龍時代に大人を真似ることで、あるべき倫理観を養うのです。

飛龍への分かれ道

天駆ける飛龍になれるかどうかは潜龍の志と、第三段階である「君子終日乾乾す」の時代をどう過ごすかにかかっていると私は考えています。

「君子終日乾乾、夕惕若。厲无咎」(君子終日乾乾し、夕べに惕若たり。厲うけれども咎なし)

「乾」は「易経」でいうところの天であり、陽を意味します。明るく積極的なイメージです。それを「乾乾」と重ねているので、とにかく積極果敢に努力して、物事を推進していく姿を表しています。

この段階は大人から一歩離れて独り立ちし、見龍時代に身につけた基本や型を実践で生かし、応用力をつけていく時期です。といってもやることは見龍時代と変わりません。さらに同じことを、積極果敢に高揚感を持って繰り返すのです。繰り返して繰り返して繰り返す